研究ノート

大学図書館との連携を通した教職課程科目の取り組みに関する考察
―教員の道は「ポップ作り」から！を事例として―

伊井　義人[1]　麓　あゆみ　加藤　舞[2]

はじめに

近年、大学教育全体で教員が一方的に話す「説明型・講義型」の講義ではなく、教員と学生が双方向にコミュニケーションをとることを可能にする活動を取り入れた「アクティブラーニング型」の講義の実践が推進されている。その流れは、大学における教員養成を目的とする教職課程科目においても例外ではない。

本報告では、藤女子大学教職課程科目の一つである「教育原理」において、講義担当者が大学図書館職員と連携し、教育に関連する書籍や映像資料の「ポップ」を制作することを通して、「教育とは何か？」を考えるきっかけを履修者に提供してきた取り組みを紹介する[i]。

全国私立大学教職課程研究連絡協議会（全私教協）は、2014年から『私立大学の特色ある教職課程事例集』を編集し、これまで二度公表している[ii]。そこで紹介されている事例は多様であるが、本稿で報告する「ポップ制作」を、その中で位置づけるのであれば、次の三つを特色としてあげることができる。

第一に、従来型の講義スタイルとは異なる「アクティブラーニング型」の講義を目指している点である。これは、事例集に掲載されている取り組みの多く、そして大学教育全体と方向性を同じくしている。

第二に、この取り組みの内容が教員養成の観点から見て、「実践的ではない」点である。教職課程は、教員免許状取得を目的としており、そのために学生たちは教育実習を経験しなければならない。そうすると必然的に、通常四年次に実施される実習を見据え、児童生徒を対象とした「教え方」や「コミュニケーション方法」など、実践的な教育内容を重視せざるを得ない。もちろん、執筆者である伊井が担当している講義も実践的な要素を含んだものも多くある。しかし、本稿で対象とする「教育原理」は、教育学的な「教養」および「原理」を学生に伝えることを重視している。つまり、アクティブラーニング的な手法を用いながら、実践的な要素とは対局にある教育学の教養・原理を学生とともに考える点に、本取り組みの特色がある。

第三に、大学図書館と連携している点である。事例集においても、教育学以外の専門分野の教員や学内外の教育的資源との連携を通した取り組みの報告は散見される。しかしながら、学内において物的・人的な教育資源が豊富に蓄積されている大学図書館との連携事例は意外なほど掲載されていない。もっとも、リファレンスの観点から、大学教員と大学図書館の連携は大部分の大学で実施されていることは間違いない。しかし、本取り組みのように、教職課程科目の講義内容に関して、連携をとった事例というのは管見の限りない。

以上の点を踏まえつつ、本稿では第一に、ポップ作成の取り組みを、講義担当教員および図書館職員の観点から報告する。第二に、本取り組みを実施者が振り返り、現段階での課題を浮き彫りにすること、第三に、今後の展開を提案することを目的とする。これらの報告および考察を通して、教職課程にとどまらず、学部段階の講義において、大学図書館との新たな連携方法を模索する契機となればと願っている[iii]。

[1] 藤女子大学人間生活学部人間生活学科
[2] 藤女子大学図書館花川館

１．藤女子大学における教職課程と講義「教育原理」の概要

藤女子大学は二学部六学科で構成されている。人間生活学部は石狩市に、文学部は札幌市にキャンパスをもち、教職課程科目も二つのキャンパスで開講されている。それは教育原理でも例外ではない。執筆者である伊井が担当する教育原理は、五学科（人間生活学部：人間生活学科・食物栄養学科、文学部：英語文化学科、日本語・日本文学科、文化総合学科）の学生を対象とし、中学校・高等学校教員および栄養教諭の教員免許状取得を最終的な目標としている。講義の規模は、年度によって異なるが、両学部ともに 40～60 名程度の履修者が見込まれ、文学部の履修者が例年若干多い。開講学年は二年生前期となる。

本稿で報告する教育原理は、教職課程科目の中でも、基礎的な教育理論を幅広く学生たちに伝える講義となる。講義開始時に、学生に提示している目的は以下の五点である。

・「『教育』とは何か」という問いに一定の答えを提示する。
・教育事象を冷静に、より深く分析する目を持つ。
・今まで知っていると思っていたこと（当たり前だと思っていたこと）に疑問を持つ。
・「教育を受ける者」から「教育を提供する者」への眼差しを転換する。
・教員採用試験への基礎作り

これらの目的を見ても、教育原理は教え方などを学生たちに学んでもらう実践的な講義というよりも、教育を客観的に見つめなおしてもらう、理論的な背景を多くもっている。つまり、教員になった際、直接的には役に立たないが、社会と教育を繋げて考え、教員として「教育や学校を考えていく」契機を履修者には提供しているのである。

これは、本学だけはなく、他大学も同様である。しかし、一コマ 90 分の講義を、教育理論を提示するだけの一歩通行の説明型の展開は困難である。もちろん、これまでも学生たちが主体的に「教育理論」を考える工夫はしてきた。ただし、課題設定などは、どうしても担当教員主導となってしまっていたのが実情であった。

２．教育原理におけるポップ制作の位置づけ

では、教育学の理論的な基礎を伝える講義において、なぜ、ポップ制作を取り組むこととなったのか。その最大の目的はシンプルで、学生に教育関連の「書籍」を読んで欲しかったからである。また、これまでの教育原理のアプローチ方法とは異なり、少しでも学生が主体的に課題設定をし、また、学生の得意分野を伸ばせる手段を模索していたのである。と言うのは、文章を作成するのが得意な学生もいれば、画用紙やペンなどを使って創作物を制作して、自らの考えを表現するのが得意な学生もいるためである。多様な観点から、学生がもつ教育に対する考えや思いを理解したいと考えていた。

また、最近の調査では、学校教員の一日の読書時間が、15 分未満と、他の職種の労働者よりも少ないという結果も出ている[iv]。そのため、学生の期間だけではなく、教員になったあとも、様々な情報資源の中から、書籍をメインに教材研究などを進めていく力を学生たちには培って欲しかったのである。

本稿で報告する教育本のポップ制作・発表は、全 15 回の講義のうち三回を割り当てている。そして、上記の教育原理の目的のうち、「教員採用試験への基礎作り」を除く、上の四つがポップ制作・発表を通して、達成が見込まれる。また、具体的に以下の六点を、学生が習得する「力」として想定している。

- 本やDVDを読んでその内容を整理する。（要約力）
- ポップをデザインする。（創造力）
- ポップを時間内で完成させる。（計画力）
- ポップの内容を発表する。（表現・伝達力）
- 発表に疑問を持つ。（適切な批判力）
- グループ内で代表者を決める。（調整力）

書籍などの要約力など、個人的な技量を求める「力」から、表現・伝達力にはじまり、グループ内での調整力といった対人的な「力」まで、広範な力の修得を求めていた。これは、ひいては、後述される「学士力」にも繋がる力である。

ただし、講義三回分の内容でこれらすべての力を修得することを目標にするのは困難であろう。完全に修得するというのは難しくても、上記のような力（スキル）が、今後教職課程を履修する上で必要となることを、学生に体感してもらうだけでも、有意義ではないかと、講義担当者は考えている。

３．ポップ制作に向けた図書館での取り組み

（１）2013年度の取り組み

2013年５月、本稿の執筆者でもあり、人間生活学科（教職課程）教員である伊井より両学部で開講している教育原理において、教育に関する本・DVDのポップを学生に制作させたいと考えているので、図書館の視点から話してほしいとの依頼があった。

当初は今まで図書館が実施してきたデータベースを用いた情報検索の方法などの情報リテラシーガイダンスとは違い、明確なルールが無い本の紹介ポップ制作について学生たちにどのように伝えれば良いのかということへの戸惑いもあったが、この講義での関わりを通して、学生が本に親しんでもらうきっかけになれば、図書館としてもより熱心な利用者の獲得に繋がると考え、実施することになった。

準備にあたり、まずはポップ制作について説明するためのパワーポイントを作成した。以前から図書館では学生のおすすめ本を展示する企画をしており、学生に本のポップを作成してもらっていたので、そこで培ったノウハウを活用しつつ、20分程度の内容で「ポップ」の意味、盛り込むべき内容、デザインのアドバイス、具体的事例などを紹介することにした。ガイダンスは最初に人間生活学部で実施し、その後文学部の講義で実施した。

ポップ制作にあたって、画用紙、マジック、のり、はさみなどの文房具は教職課程の方で用意していたが、図書館からも提供した。過去に図書館で展示してくれた学生の実際のポップも参考にしてもらうため教室に持参し、自由に手に取って見てもらったこともあって、予想以上にスムーズに作業していたように見えた。成果物のポップは全て図書館に一定期間展示し、講義の様子は図書館だより 87 号に掲載した[v]。

（２）2014年度の取り組み

2013年度はガイダンスをした週のみの講義への関わりだったため、ポップ制作後に学生全員が一人ずつ発表したことは後から伊井より報告を受けていた。一人ひとりが発表するのも良いが何十人も発表していくうちにどうしても「中だるみ」してしまうということ、ビブリオバトル[vi]をやってみたかったという担当教員の感想を受けたこと、何かアイディアはないかと打診されたこともあり、2014年度はビブリオバトルのエッセンスを取り入れて、学生同士の相互発表、ディスカッションを念頭においた“ポップコ

ンテスト”と銘打ったプログラムの実施を提案した。

提案した内容に関して伊井と協議し、全三回構成として内容を固めていった。図書館職員が全三週のすべての講義に参加することにし、進行は基本的に伊井が行い、図書館職員はポップの作り方やグループ発表の仕方などの説明、写真などの記録、ディスカッション時のファシリテーターとして参加することになった。まずは講義の前段階として教育に関する本（マンガを含む）やDVDを選び、予め読んで、または鑑賞してきてもらうこととする。

そのうえで、一週目でポップ制作について図書館側から話し、その時点で選んだ本やDVDについてのアンケートを取る。学生たちがポップ制作を行っている間に、アンケート結果をもとに学科がほどよく分散されるように図書館側でグループ分けをし、二週目までにグループ表を人数分印刷しておく。

二週目の時間の前半でポップを完成させ、ポップコンテスト予選として少人数のグループ内で自分が作ったポップの発表をしてもらった。ここで予定通り時間を管理するために、ビブリオバトルで使われるタイマーを使用し、スクリーンに流して開始・終了などの区切りでベル音も鳴るようにした。通常のビブリオバトルは発表時間が５分だが、全三コマの講義時間内に終わるようにするという制約から、発表時間は３分、ディスカッションタイムを２分というように設定した。ディスカッション時、発表者への質問内容に関しては、発表内容についての批判や揚げ足取りはせず、最終的に判断するために必要な補足の質問をするようにと指示した。また、沈黙が生じることを懸念して最初の質問者だけあらかじめ指定したが、概ね時間の枠をすべて使って活発に意見を交換していたように見えた。

全員の発表とグループ内ディスカッションが終わった段階で、グループごとに本選に進む代表者を決めてもらった。代表を決めるにあたっては、ポップやプレゼンテーションの完成度だけではなく、本を読んで得た＜教育とは何か＞という視点がポップや発表を通して表現できているかどうかについても考慮するよう指針を示した。本選では代表者が発表することになるが、グループ内の他の学生も講義に参加してもらえるよう、発表時間の中にグループ全員参加の応援コメントの時間を設けることとし、内容もその場で決めてもらった。

三週目は、前週と同じグループで着席してもらい、代表者と作品名を記載した紙を配付し、グループの順番に発表してもらった。ポップを手に持ったまま発表すると、書かれている文字などが見えない恐れがあるため、OHPを使ってスクリーンに映写しながら発表してもらった。ポップによっては立体的なデザインのものもあったため、動かしながら発表するなどして工夫した学生もいた。発表時間３分と応援コメント２分という時間配分は決めたが、内容やコメントの順番などの調整は学生たち自身の裁量に委ねた。それぞれのグループの発表後、担当教員が学生の中から質問者を指定し、発表者がそれに答えた。

全員の発表が終わってから投票をしてもらい、優勝グループを決定した。優勝グループには教職課程から予算をいただいて手作りで作成した図書館キャラクター“きしんさん”のエコバッグをグループ全員に贈呈した。

最後に担当者の伊井が全三回の講義の総括をし、図書館職員からもそれぞれコメントして、終了となった。講義後は初年度と同じく図書館内で展示もし、こちらでも投票を受け付けて得票上位３名に優勝グループと同じエコバッグを贈呈した。

（３）2015年度変更点

昨年度の内容を踏襲しつつ、いくつかの改善項目を洗い出した。まずは、ポップ制作を始める前に、ポップを作ることそのものだけが目的ではなく、本を読むことで視野を広げてほしいということ、ポッ

プ作りや発表からは要約力、表現力が醸成されることを期待しているというようなこの講義のねらいを学生に伝えることにした。

また、昨年度まで教育に関する内容なら映像作品も可としていたことについて、2015 年度は対象を本に限定した。これに関しては本に限定することで全体のレベルも上がったと思う反面、本を読み込みきれていない学生も一定数見受けられた。

「第 61 回学校読書調査」で、一カ月に一回も本を読まないと回答した高校生の割合は 52%、「第 51 回学生生活実態調査」2015 年調査で大学生の中で読書時間が０分と答えた者の割合は 45%となっており、若年層に本を読む習慣が定着していないことがうかがえる[vii]。それが単に今まで本と接する機会がなかったためと捉えるならば、今後は本を読むという課題を出す前に、学生に対して読書の技術と呼べるようなものを教えることができれば、学生個々の「学士力」向上のためにも有用ではないかと感じた[viii]。

ポップコンテスト予選におけるグループ内発表においても、初めて話す他学科の学生とのコミュニケーションをより円滑にするため、一人 30 秒間で自己紹介をする時間を設けた。

また、文学部では、2015 年４月に新設されたラーニング・コモンズを利用してポップコンテスト本選を行うことが決まった。学内に向けて開放している場所で開催されることから、関係教職員にメールで案内を出したほか、図書館内にも掲示を出した。受講していない学生の観覧も可能とし、全体を通して発表を見た場合は誰でも本選の投票権が得られることとした。

ラーニング・コモンズの一角に講堂で使用している指揮台を運び込み、簡易的なプレゼンスペースとした。代表者のポップは事前に写真におさめて電子黒板に表示させたが、電気設備の関係で場所を限定した消灯ができず、電子黒板が見辛い状況となってしまったのは課題である。

ガラス張りで廊下からも見えるスペースのため、外を通りかかる人からも注目され、数人だが教職員の観覧もあり、いつもと違った気持ちで学生も発表できたようだった。

写真：文学部での発表風景
ポップコンテスト本選（ラーニング・コモンズ）

写真：人間生活学部での発表風景
ポップコンテスト予選

当日ラーニング・コモンズにおいては代表者以外のポップの展示も行った。また、前年度は優勝グループにだけ記念品を贈呈したが、図書館にもっと親しみを持ってもらいたいということで、“きしんさん”のしおりを作成して受講学生全員に配付することにした。全部で五種類あり、学生にも好評だった。

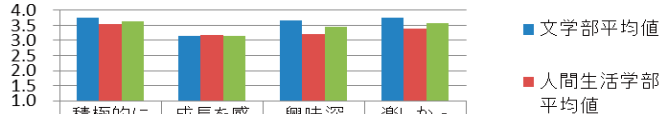
さらに、３年目という節目にあたるため、両学部の受講学生にこの試みについて聞くべく、講義内容及び図書館に関するアンケートを実施した。アンケート内容は図書館と担当教員との間で協議して決定し、図書館からは同時にラーニング・コモンズに関するアンケートも取らせていただいた。この調査結果については、本稿では扱わないが、別の場での公表を検討したい。

４．2015 年度のアンケート結果

（１）全体の傾向（グラフなどを含む）

2015 年度のみ、今回の講義について、直後の両学部での通常講義の時間に、受講学生を対象としたアンケートを実施した（文学部６月 12 日、人間生活学部６月 16 日）。アンケート総数は文学部 40 件、人間生活学部 39 件であった。設問１～５は四段階評価で、設問６は４択、設問７は自由な回答形式である。結果は下記のとおりである。

設問１．ポップ作成・発表の参加型の授業を受けてどう感じましたか。（４段階評価）

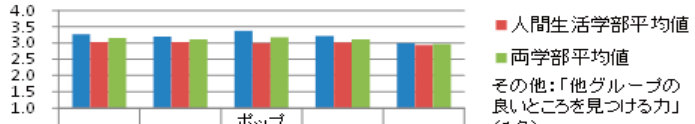


	積極的に参加した	成長を感じた	興味深かった	楽しかった
文学部平均値	3.8	3.2	3.7	3.8
人間生活学部平均値	3.5	3.2	3.2	3.4
両学部平均値	3.6	3.2	3.4	3.6

設問 1 では、今回の講義に積極的に参加したかどうか、参加してどう感じたかを四段階で評価してもらった。積極性については、両学部平均値 3.6 とほとんどの学生が積極的に参加したことがわかる。

文学部の方が、人間生活学部より 0.3 ポイント高い。成長を感じたという評価は 3.2 で、両学部同一結果となった。講義中、初めてやることに対して緊張する学生の姿も見られたが、仲間と協力してやり遂げることで成長を感じた様子がわかる。興味深かった、楽しかったは、いずれも文学部のポイントが高く、日常的に本に親しんでいる学生が多い傾向があるのかもしれない。

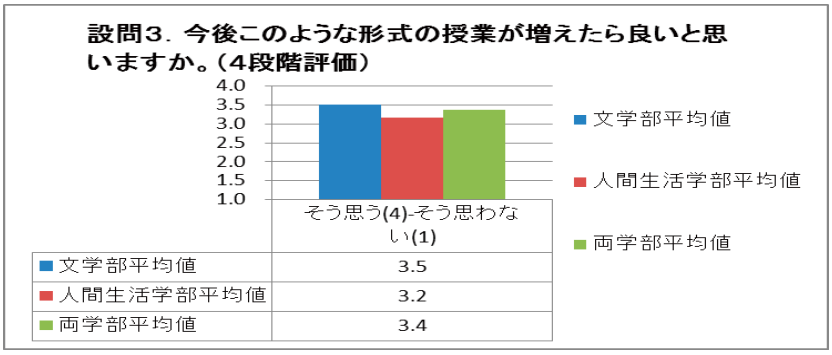
設問2．ポップ作成・発表の講義で、身についたと思う「力」を教えてください。（4段階評価）

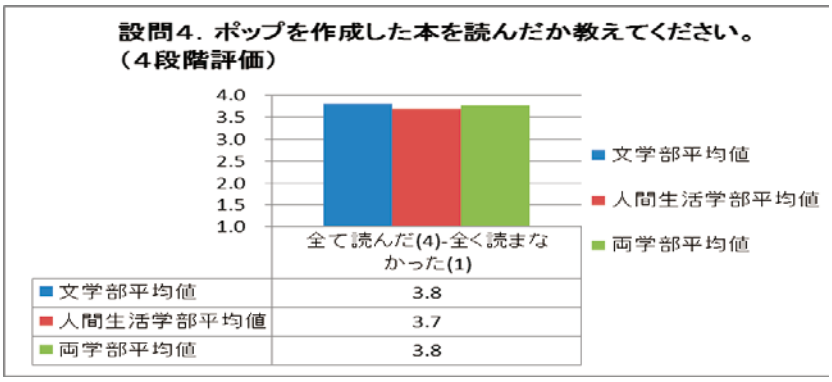


	本の要約力	本の読解力	ポップの創造力	発表力	コラボする力
文学部平均値	3.3	3.2	3.4	3.2	3.0
人間生活学部平均値	3.0	3.0	3.0	3.0	2.9
両学部平均値	3.2	3.1	3.2	3.1	3.0

設問２では、講義を通じて身についたと思う「力」を評価してもらった。両学部とも、講義中楽しみながら工夫を凝らしてポップを作っている様子が見られ、両学部平均値では「ポップの創造力」、「本の要約力」が 3.2 と最も高い。特に文学部平均値では「ポップの創造力」が 3.4 と最も高くなっている。人間生活学部平均値では、最も低い「コラボする力」の 2.9 以外はすべて 3.0 と同じ結果となった。「コラボする力」は文学部でも最も低くなっており、自分一人で行う作業については成長を感じられる傾向があるが、他者と協力してやる作業は苦手意識から自己評価が低くなっているのかもしれない。ただ、職員の視点から見ると、これまで話したことのない学生同士が協力しあい、短時間で発表を作りあげていく姿は目を瞠るものがあった。予想以上に活発なグループが多く、うまく協力してやれるか

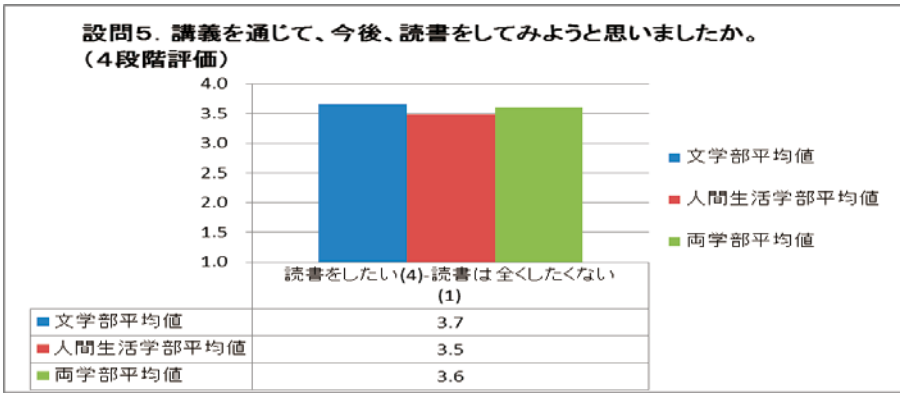
という当初の不安は杞憂であった。





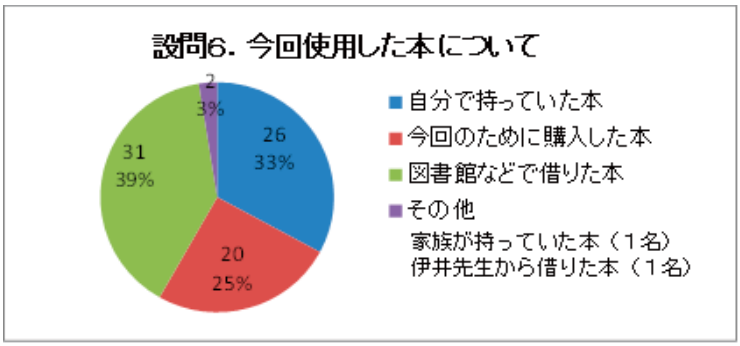
設問３では、このような形式の講義が増えたら良いと思うかどうか訊いている。両学部平均値 3.4 と、かなりの割合の学生が参加型の講義に対して肯定的な評価をしている。文学部の方が 0.3 ポイント高く、設問１、２の結果と同傾向がある。

設問４では、ポップを作成した本を実際に読んだかどうかを確かめた。すべての設問のなかで平均値が最も高く、両学部ともほとんどの学生がすべて読んでいるようである。数は少ないが評価が低く、全部は読んでいない学生も一部存在した。



設問５では、講義が読書をする動機づけになったかどうか尋ねたが、「今後、読書をしてみよう」と思ったという評価は両学部平均値 3.6 と高く、意欲的な結果が出た。自由回答欄では、「自分の知らない本や読んでみたいと思った本に出会えてよかった」という意見もあった。0.2 ポイント文学部が高く

なっている。



設問６では、今回使用した本の入手経路について４択で回答してもらった。「その他」という回答も２件あり、注記した。結果は分散しており、図書館で借りたという回答が最も多かったが、今回のために購入したという回答も予想より多かった。図書館で学生に接していると、様々なことに経費が必要な学生生活において、本を自費で購入することに抵抗がある学生が多いのではないかと感じていたが、そうとは限らないようであった。もしくは、今回の講義で使いたいと思う本が図書館では見つからなかった可能性もある。

設問７は、「今後、この形態の授業をより良くしていくために、感想や意見を自由にお書きください」という自由記述欄とした。多くの回答のなかから一部を下記に挙げる。

文学部

・教育についていろいろな視点から考えるきっかけとなるので続けていったら良いと思った。
・やってみて、アメリカなどの学生ディスカッションのような雰囲気を感じました。
・この授業で協力し合える新しい仲間ができて、楽しかった。他学科と交えたグループで活動するのはとても良いと思った。
・これから「教育とは？」を考えるための、よい導入だったと思います。図書館が身近に感じられて、よかったです。
・もっと準備時間がほしいです。

人間生活学部

・前で話すのがとても緊張しました。苦手！もっと前で話すことに慣れたいので、発表の機会が増えてほしいです。
・もし他大でもできるのなら他大でもやってもらって戦いたいです。
・難しい題材だったので、理解し要約するまでが大変だった。その分、力はついたと思う。又、他学科の人とグループを組まれたことで、コミュニケーション力の向上にもつながったと思う。ただ、２人ずつ同じ学科の人と組み合わさるようなグループ分けだと良かったと思う。
・この授業をきっかけに久々に本を読みました。本のおもしろさを思いだせたように感じます。

概ね高評価で、設問１～５の回答結果にあるように、事前に本を読んでから積極的に参加し、またこういう形式の講義に参加したいという肯定的意見が多数を占めた。講義の実施方法については、時

間がたりないという回答が多く、実際にポップ作りの際も講義の時間だけでは足りずに家で作ってきたという声が聞かれた。グループの代表だけではなく、全員の発表を聞きたかったとの意見もあった。

（２）人間生活外部と文学部の傾向の違い

人間生活学部と文学部の傾向について、アンケートでは結果にあまり差が出なかったが、両学部の講義に交代で参加した本館・花川館職員の目から見るとそれぞれの学部の特性がわかり興味深かった。例えばポップ作りの過程を見ていると、文学部ではまず文章の下書き、全体のアウトラインを綿密に決めてから制作に取り掛かる学生が多かったのに対して、人間生活学部ではすぐに制作に取り掛かり、作業と構想を同時並行で行う学生が多かった。発表においては、文学部は本の内容をじっくり読み込んでから発表している学生が多いと感じたのに比べ、人間生活学部の学生は自作の小道具を使ってコント仕立ての発表をするなど、団結して新たなものを作り上げる力の高さを感じた。

型に当て嵌めた言い方になってしまうかもしれないが、文学部は総じて真面目で努力する学生が多く、人間生活学部は自由な発想ができる学生が多いと感じた。

このように同じテーマで課題をこなしていても、学部によって振れ幅があるということを学生自身にも感じてもらえたら、更なる成長が見込めるのではないかと感じる。両学部共同での講義の実施は実現困難かもしれないが、この試みが終わった次の週などに他キャンパスの発表風景を映像で見てもらうなどはすぐにでも実現可能であると思われる。

人間生活学部の教職課程受講生は、人間生活学科学生が大多数のため、始めから打ち解けた雰囲気があった。人数の少ない食物栄養学科の学生を一人ずつ人間生活学科学生の中に入れるグループ分けをしたため、配慮を希望する意見もあった。

文学部は三学科がほぼ均等に混ざったグループ分けにしたため、始めは緊張感もあった。2015年度ではないが、二回目のグループ内での発表の際に、言葉に詰まって涙ぐむ学生に対して、その日に同じグループになったばかりの他学科の学生も暖かく励まし、学生同士の絆が生まれているように見えた場面もあった。

本学では、学科を超えた交流がクラブ活動以外では持ちにくい状況がある。アンケートの自由回答でも、他学科学生と一緒に作業する機会となったことを肯定的にとらえる学生が多かった。

（３）ポップ制作の意義と課題

2013、2014年度は、教育に関係するものであれば、ポップ作りの題材をマンガやDVDでも可としたが、2015年度は本のみが対象となり、読書することへのきっかけとしての側面が強くなった。図書館では、本に親しむ習慣がないまま大学生になった学生が年々増加しているように感じており、教員からもそのような言葉を聞くことが増えている状況がある。教職課程を受講していても、これまで教育関係図書を読んだり、調べたりする機会がなかった学生もいると思われ、図書館や書店で教育関係の書架の前に立つことで、どんな本があるかを知る機会にもなったはずである。

本の内容については、硬軟かなり幅があった。教育には関係しているが、ヤングアダルト向け小説なども含まれていた。教職課程の始まる二年生の講義なので最初の入り口としてはよいのかもしれないが、ある程度読み応えのある本に絞る、事前に指定した図書リストの中から選ぶなどの制限を設けることも考えられる。

図書館では講義の直前に教育関係図書を借りに来る受講学生の姿も見られ、アンケートでも今後読書をしたいという回答が多いという結果が出て、ポップコンテストという講義が、図書館利用、読書

をすることへの動機づけとなったと考える。ネットでの安易な情報収集でレポート等も済ませる学生が増えるなかで、今後、大学生として日常的に本を読み、自ら考察していくことへつながることを期待する。

（4）図書館職員から見たポップ制作の意義と課題

今回の講義には、両キャンパスの図書館職員が関わった。当初は不安もあったが、両学部とも、学生が積極的にポップ作りに取り組み、協力しあって充実した発表を作り上げたことに感銘を受けた。グループの代表者以外のメンバーも一緒に前に出て懸命に発表を盛り上げるなど、学生たちが持っている力を感じたし、教師として活躍するために必要なコミュニケーション力、プレゼンテーション力が醸成されたのではないかと考えている。

ポップを作り、発表するためには内容を読み込んで要約し、表現する力が必要で、学生は短い時間のなかで真剣に取り組んでいた。アンケート結果を見ると、学生自身も手応えを感じてくれたようである。教員と図書館が協力することで、講義のなかで新しい形を実践できたのなら嬉しい。教職課程の講義には、他課の職員も教室で話をするなど関わっていると聞いている。図書館も、他の教員からも要請があり、講義に出張して情報の集め方などの話をする機会も増えてきている。大学のなかで、職員は教員ではないので、講義にどこまで能動的に関われるのか、教育の質保証の責任の所在についてはどうなのかという点は今後、考える必要がある。

大学教育のあり方について議論されるなかで、学士力が求められている。現在、人間生活学科には一年生の必修科目として「スタディ・スキルズ」という大学での学びを教える講義がある。例えば本の読み方を教えるワークショップなど、大学生として、他学科も含め、本を読み、学ぶことを伝える初年次教育についても今後検討していく必要があるのではないだろうか。

まとめ

最後に、今回の教育原理におけるポップ作成の取り組みについて、「教育内容面」と「大学内連携面」の二つの観点から、今後の課題を提示したい。

まず、教育内容面に関しての課題である。アンケート結果にも示されていたように、履修学生は、本取り組みに対して、一定の満足感を得ている。しかしながら、第一に、本来の目的である「書籍内での情報を精緻に読み込み、要約し、他者に伝える力」に関しては、課題が浮き彫りとなっている。率直に言うと、この目的が伝わっていない学生も一定数存在する。ただし、そもそもポップ制作は学生の主体的な活動を促すことを意図して実施している。担当教員・図書館職員から強く助言したのでは、その意図を見失うことになる。本来の目的の達成と、学生の自主性のバランスの調整が今後必要といえる。

第二に、取り組みの後半では、他の学生とのグループワークがメインとなる。その過程において、学生自身が、他学科に所属する他の履修者の特性（個性・意見）や読んだ本の「多様性」をいかに受け入れ、情報交流を可能にする工夫を講義提供者側は意識しなければならないだろう。自分と「異質」なものと接することにストレスを感じる学生も当然履修している。しかし、学校は、様々な個性が協働しあって成り立つ場所でもある。多様性をマネジメントしていく経験や知見を、教員を目指す学生には授業内でも経験してもらいたい。

次に、大学内での連携面からの課題である。現状として、大学教員が図書館職員の協力を得て、それぞれの専門性を活かして、講義を展開しており、学生からも肯定的な評価は得ているといえる。一方で、教員・職員がその専門性を十分に学び合う工夫がなされているかは今後、更に検討しなければならない。

これは、我々だけの課題ではなく、FD（ファカルティ・ディベロップメント）やSD（スタッフ・ディベロップメント）を通して、講義を中心とした大学における教育実践の質を一層向上させるために、教員・職員間の専門性を活かした連携が組織だって推進される工夫を大学として展開して行くべきであろう。

以上のとおり、教育内容面・大学内連携面から取り組みの課題を整理した。もちろん、この課題を提示することが、これまでの取り組みの意義を損なうものではない。これまで三年間の蓄積を振り返ったうえで、今後、一層の大学図書館との連携を推進していきたいと考えている。

---

[i] 2014年６月の日本カトリック大学連盟図書館協議会の実務研究会（担当校：藤女子大学）において、伊井義人・加藤舞が「教員への道は『ポップ作り』から！」という題目で発表している。詳しくは http://www.catholic-u.jp/tosho_katsudo.html を参照のこと（2016年３月21日アクセス確認済）。本稿も本研究発表を踏襲している部分がある。

[ii] 全国私立大学教職課程研究連絡協議会『私立大学の特色ある教職課程事例集』2014年、同『私立大学の特色ある教職課程事例集Ⅱ』2015年、を参照のこと。

[iii] 本稿は、「はじめに」「１」「２」および「おわりに」を伊井が、「３」と「４」を麓・加藤が担当した。

[iv] 連合総合生活開発研究所の調査を参照のこと。http://rengo-soken.or.jp/event/2016/02/post-10.html （2016年３月21日アクセス確認済）

[v] 詳しくは、藤女子大学図書館ウェブサイト（http://www.fujijoshi.ac.jp/file/contents/1100/9548/87.pdf）を参照のこと。（2016年３月21日アクセス確認済）

[vi] ビブリオバトルとは、推薦者がお勧めしたい本を５分間という決められた時間の中でプレゼンテーションして、それぞれの発表が終わったあとに参加者全員で２～３分のディスカッションをし、最後に参加者全員の投票によりチャンプ本を決定するというイベントで、京都大学で実験的に行われた試みから発展し、今では全国各地の大学で実施されている。

[vii] 毎日新聞社『第61回学校読書調査』（2015年調査）毎日新聞2015年10月27日朝刊、および、全国学生生活協同組合連合会『第51回学生生活実態調査（2015年調査）』について詳しくは、同連合会ウェブサイト http://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html （2016年３月21日アクセス確認済み）を参照のこと

[viii] 「学士力」とは、2008年３月の中央教育審議会大学分科会（「学士課程教育の構築に向けて」）で提示され、「知識・理解」、「汎用的技能」、「態度・志向性」「統合的な学習経験と創造的思考力」として、提示された。